

# 看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント 教育の現状

## —m-learning の視点から—

遠藤 恭子\*, 板倉 朋世\*, 河野 かおり\*

### Current Situation of Physical Assessment Education in Basic Nursing Education

#### —The View from m-learning—

Kyoko ENDO\*, Tomoyo ITAKURA\*, Kaori KONO\*

#### 1. はじめに

看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育は、1996年に聖路加看護大学で正式な教育科目として導入されて以来、約20年が経過した。2011(平成23)年度の厚生労働省「看護教育の内容と方法に関する検討会報告書」<sup>(1)</sup>では、「助産師や看護師には、対象者の生命の維持や、身体の苦痛を早期に和らげるための技術が必要である…(中略)…フィジカルアセスメントについて強化する必要がある」と示されていることから、看護基礎教育におけるフィジカルアセスメント教育は、重要な位置にあるといえる。

フィジカルアセスメントの教育方法は、教科書や動画などの教材のほか、模擬患者やシミュレータロボットを用いた教育方法が検討されている。模擬患者を用いたフィジカルアセスメント演習では、「患者への配慮やコミュニケーション技術の向上」<sup>(2)</sup>がみられ、「模擬患者との面接で臨場感のある体験ができ実体験に基づく学びを得られた」<sup>(3)</sup>と、模擬患者との相互作用による学修効果が報告されている。しかし模擬患者を用いた演習は、模擬患者間の知識・技術の格差や事前の教員の負担の大きさ、費用対効果の問題など数々の課題を抱えている<sup>(4)</sup>。一方でシミュレータロボッ

トを用いた演習では、「シミュレータのリアル感に緊張感や不安感があった」<sup>(5)</sup>ことや、「シミュレータを用いたシナリオトレーニングに対し、学生は興味関心を持って参加していた」<sup>(6)</sup>ことが報告されている。シミュレータロボットは、呼吸音や心音の聴取のほか、内蔵されたプログラムによって、シナリオに沿ったフィジカルイグザミネーションとアセスメントの学修が可能である。しかし、シミュレータロボットは非常に高額であるため、学生が自由に学修に使用できるものではなく、大学構内や病院内などの限られた場所で、限られた時間にしか使用できない。1～数台のシミュレータロボットがあったとしても、全員の学生が十分に学修に利用することは困難である。そのため、シミュレータロボットを使った学修では、フィジカルアセスメントに必要な学修は十分に行えない現状があると考えられる。

近年、ICT (Information and Communication Technology) の発展により e-learning が普及してきた。青島<sup>(7)</sup>は、教材をデジタル化することにより、「言葉での説明だけでなく視覚的にもイメージとして捉えやすくなっていくので、知識の定着率も生徒への授業のモチベーションも高くなってきた」と、教育の効果を報告している。看護基礎教育においては、山下<sup>(8)</sup>

\* 獨協医科大学看護学部 (Dokkyo Medical University School of Nursing)

受付日: 2019年11月28日; 再受付日: 2020年2月14日; 採録日: 2020年3月30日